

テーラワード佛教と大乘佛教

ワルポーラ・ラーフラ

長崎法潤訳

ただ今、学長先生からあたたかい歓迎のお言葉をいただきまして、ありがとうございます。また、佛教学科主任の桜部建先生から御紹介いただき、心から御礼申し上げます。

皆様方は、私はスリランカ出身のテーラワード比丘であり、あなた方は大乘佛教徒であると思っておられるかもしれませんが、私にとりましてはテーラワード佛教徒と大乘佛教徒という区別はございません。佛教は一つでありまして、みな同じ佛教徒であります。そこで本日は、「テーラワード佛教と大乘佛教」という講題を選び、テーラワード佛教と大乘佛教との比較検討を行なってみたいと思います。

テーラワード佛教と大乘佛教、あるいはむしろヒーナヤーナ佛教 (Hinayana 小乗佛教) と大乘佛教という区別は、西洋人によってなされた、たいへん間違った解釈であります。それは特に一九世紀の終から二〇世紀の初にかけての頃であります。佛教をそのように区別した西洋人とは、初めは、キリスト教をひろめるために東洋にやって来たキリスト教の伝道師でありました。その次には、佛教に対してそれほど同情的な気持をもたない西洋の東洋学者でありました。彼等はテーラワード佛教と大乘佛教、あるいは小乗佛教と大乘佛教とを、ちようどカトリックとプロテスタン

トとの対立のような観念でとらえたのであります。キリスト教では、カトリック信者とプロテスタントの信者とは敵意をもっていきまして、カトリック信者はプロテスタントの教会にお祈りに行こうとしませんし、プロテスタントの信者はカトリック教会に参りません。

ところで佛教の場合にはそのようなことはありません。私が日本に来れば、日本の佛教寺院にお参りにまいります。また、あなた方がスリランカに行かれれば、テーラワード佛教の寺院に詣でておまいります。そこには何の区別も相違もありません。これは新しい傾向ではなく、古くから佛教徒はお互に対立するようなことはありませんでした。五世紀にインドを旅行した中国の法顕も、七世紀に訪れた玄奘も、インドでは小乗佛教の僧と大乘佛教の僧と同じ寺院で共に学んでいた、と記録に残しております。そのような伝統はその当時から現在まで続いております。

私の友人である中国のお坊さんがスリランカに來られ、私と同じ寺院でパーリ語の三藏を勉強されました。私はお坊さんから中国語を学んで、大乘の経論を読みました。そのお坊さんが、今私がつけている法衣をくださいました。これは中国の大乘佛教僧がつける法衣ですが、たいへん便利ですので、ヨーロッパでも私はこれをつけております。さらにそのお坊さんは、スリランカの比丘がつける法衣をつけておりました。

最初に申し上げましたように、私にとっては佛教は一つであります。すべての佛教徒は一つであります。もちろん、テーラワード佛教と大乘佛教との間には、修行の仕方、行事等に関して外面的な相違がありますが、それらはあくまでも本質的なものではありません。

皆様方は佛教を学んでいる方々ばかりでありますので、佛教の起源についてはよく御存知のことと思います。佛陀が教えをお説きになられたときには、一つの佛陀の教えしかありませんでした。それはサンスクリットとパーリ語で *Buddhāvacaṇa* (佛陀のことば、佛陀の説かれた教え) と言われています。

佛教の歴史によりますと、ゴータマ佛陀が亡くなられて三ヶ月後に、王城舎で五〇〇人の比丘が集会して、佛陀の

教えをまとめ集めるために結集を行いました。それが第一結集であります。その席で比丘たちが承認をえた佛陀の教え(Buddhavaṇa)はテーラワダ(Theravāda)、すなわち長老たちによって認められた教え、と呼ばれました。その第一結集のときには、佛弟子の間には意見の相違はありませんでした。

それから一〇〇年後、ヴァイシヤリーで第二結集が開かれました。戒律、実践に関して、教団内に意見の対立が生じたからであります。その時進歩的な比丘たちは、伝統的で保守的な長老たちの意見に従うことができず、彼等は大家部(Mahāsāṅghika)という名のグループを形成しました。その時にも、もちろん、大乘佛教と呼ばれる佛教はありませんでした。

佛滅後二〇〇年のころ、アショーカ王の時代にパータリプトラで第三結集が開かれました。その結集の席で、何人かの比丘からある意見が提唱されましたが、それは正統ではないとしてしりぞけられました。これらの意見についてはパーリ語のカターヴァットウ(論事)の中に説明されています。その時にも大乘という言葉は見出されません。

マハーヤーナ(大乘)という言葉が最初にあらわれたのは般若経と法華経においてであります。両経典は紀元前一世紀ごろに属しておりまして、そこにおいて初めて大乘という言葉が見出されます。マハーヤーナという言葉がはっきり定義づけられるようになったのは、一世紀から二世紀にかけてであります。

次にテーラワダ(Theravāda)という言葉をとりあげてみたいと思います。今申し上げましたように、アショーカ王の時代に第三結集が開かれ、その後佛教はスリランカに伝わりました。第三結集で承認をえた佛陀の教えが直接スリランカに伝わったこととなります。言いかえますと、第三結集で承認をえたテーラワダ(長老たちが承認をえた佛陀の教え)がスリランカに伝えられ、それがそのままの型で今日まで続いております。スリランカでは、テーラワダ佛教と大乘佛教とか、小乗佛教と大乘佛教とかいうような諍論は行なわれませんでした。ところで、テーラワダ佛教は大乘佛教でもないし、小乗佛教でもないと思えます。それは大乘や小乗とは異なった、完全にオリジナルな

佛陀の教えであります。今日では、大乘佛教の歴史に記されているヒーナヤーナ（小乗）という宗派はすべてなくなりました。大乘佛教は今でも中国、日本、韓国、ベトナムに現存しています。それに対し、最初スリランカに入ったテーラワード佛教は、スリランカ、ビルマ、タイ、カンボジア、ラオス、チッタゴン、インドの一部で今も行なわれています。

パーリ語の文献、すなわち三蔵、注釈、複注、伝記にはマハーヤーナ（大乘）という言葉もヒーナヤーナ（小乗）という言葉も出てまいりません。ところで五、六世紀に書かれたスリランカの歴史書、すなわちマハーヴァンサ（大史）とディーパヴァンサ（島史）の中に、Vetulla という言葉が出ています。実は Vetulla はマハーヤーナ（大乘）に相当するのです。無著の Abhidharmasamuccaya（大乘阿毘達磨集論）の中に、Vaitulya と Vaipulya とは同義語であると言われています。Vaipulya は、疑いなく大乘を意味しますから、Vaitulya も大乘を意味することになります。Vaitulya はパーリ語では Vetulla になります。以上によって、マハーヤーナという言葉は見出されないけれど、それに相当する Vetulla とどう言葉が用いられていることが御理解いただけただけだと思います。

さて、大乘佛教であろうとも小乗佛教であろうとも、またテーラワード佛教であろうとも、もともと三蔵は同じであります。佛滅後二〇〇年ころには、一八の部派が成立していたと歴史的に言われていますが、それらは異なった部派であっても、三蔵は共通しています。ただ解釈において異なる点があるだけです。

テーラワード佛教では三蔵はパーリ語で伝えられています。大乘とか説一切有部とか、その他の部派ではサンスクリットならびにその他の言語で書かれています。大乘では経はアীগガマ（Āgama 阿含）と呼ばれています。テーラワード佛教ではニカーヤ（Nikāya）と呼ばれています。しかしそれも絶対的ではなく、パーリ語の注釈には、後になりますと、ニカーヤの代りにアীগガマ（阿含）という言葉も用いられています。

さらに、ニカーヤと阿含との間には多少相違がありますが、それは根本的なものではなく、ほんの些細な違いであ

ります。例えばパーリ語の三蔵で、佛陀がある教えをシュラーヴァスティ（舎衛國）で説かれたとなっていて、それに相当する阿含では、その教えはラージャガハ（王舎城）で説かれたとなっていたりします。その他細かな点に関しては一致しないところがあります。根本的な教えに関しては全く同じであります。あるベトナムの比丘の著書でパーリ語の *Majjhima Nikāya*（中部經典）と中阿含經とを比較研究したものがあります。それを読みますと明らかですが、教義はほとんど異なっています。相違は些細な点のみであります。

ところで入楞伽經、維摩經、解深密經、法華經等、後に成立した大乘經典があります。それらは本来の三蔵の中に含まれていませんが、三蔵の教えを基礎にして成立しました。しかし、それらは純粹に大乘經典でありまして、佛陀が説かれたことになっておりますが、研究の結果によれば、それらは少し後に成立したものであります。

今まで歴史的な観点からテララワード佛教と大乘佛教とについて申上げてきました。最初に申上げたように、大乘佛教、小乗佛教という区別した考え方をしたのは西洋人でありました。ところで現在はヒナヤーナ（小乗）という言葉は用いられません。一九五〇年にコロンボで世界佛教徒會議が開かれ、日本、中国、韓国、スリランカ、ビルマ、タイ、カンボジャ等の諸國、さらにヨーロッパの國々をも含めて二九ヶ國の代表者が出席しました。その時、ヒナヤーナ（小乗）という一派は現存しないから、ヒナヤーナ（小乗）という言葉は使わないことを出席者全員で決議しました。その代りにテララワード佛教という言葉を用いることになりました。今日でも頭の古いヨーロッパの学者がたまにはヒナヤーナという言葉を用いることもあります。人々はみなテララワード佛教という言葉を使います。

ここで重要なことを一つ申し上げましょう。テララワード佛教では阿羅漢になることを目的にする、大乘佛教では、菩薩になり、最後にすべての衆生を救うために佛になることを目的にする、と多くの人々が思っています。これはたいへんな間違いであります。佛教をよく知らない人々がこのような間違った考え方をひろめたのであります。とくに西洋人とか、西洋で学んだ学生たちが、佛教を本当に知らないで、それを信じたのであります。

佛教では、声聞乘、縁覚乘、菩薩乘というさとりに通く三つの実践道が説かれています。しかも、大乘佛教でもテララワダ佛教でも一致して、菩薩になつて衆生を救うために佛になることを最高の目的であると認めています。大乘の論書に三乗が説かれ、そのうち菩薩乗が最高の実践道であると説かれていることはよく知られています。パーリ語の文献の中にも同じことが説かれています。しかしながら、少し異なるところは、テララワダ佛教では、すべての者は菩薩になるべきであるとは説いていません。能力、素質のある者は人々を救うために菩薩になるべきであると説き、その能力のない者は声聞あるいは縁覚になるのであります。要するに、テララワダ佛教でも菩薩になることが最高の目的であると説いていることには変わりありません。ですから、テララワダ佛教では実践道として声聞乘のみを強調し、菩薩乘を説くのは大乘佛教のみである、という考えは間違つた解釈であります。西洋の学者がそのような間違いをおかしたのであります。つけ加えておきたいことは、大乘佛教では菩薩思想が特に大きく展開しました。それに対して、テララワダ佛教では大乘佛教ほど菩薩思想は展開しませんでした。

それでは、ここで、佛教の基本的な教義をとりあげてみましょう。大乘佛教でもテララワダ佛教でも共通して基本的教義を説いております。それらのいくつかをここにあげてみましょう。

- (一) 四 聖 諦
- (二) 八 聖 道
- (三) 縁 起
- (四) 四 念 処
- (五) 無常、苦、無我の三無常
- (六) 戒、定、慧の三学
- (七) 無 我

今あげました教義については、皆様よく御存知と思いますので、説明申し上げる必要はないと存じます。これらの教義はすべてテーラワード佛教でも大乘佛教でも重要な基本的教義であります。

(八) 空

空は大乘佛教の教義、すなわち龍樹の独創的な哲学であると西洋の学者は思っておりますが、これは間違いであります。実はパーリ語の文献の中に沢山見出されます。私はこのことについて論文を書き、ある学会で発表したことがあります。それを聞いていた諸先生はたいへん驚いておりました。空は大乘佛教でのみ説かれるのではなく、パーリ語の文献にもよく見出されるのです。

(九) 阿頼耶識 (alaya-vijñāna)

多くの人々は、阿頼耶識は大乘佛教で初めて説かれたと思っております。例えば、大乘莊嚴經論を佛訳したシルヴァン・レヴィ先生も同じような御意見であったようです。ところが、そうではありません。私はパーリ語のテキストの中にそれに相当する思想を見出しました。alaya-vijñāna に相当するそのままの言葉はありませんが、alaya があります。無著自身も、阿頼耶識の萌芽は原始佛教經典の中に見出されると述べております。

(十) 唯 識 (vijñāpimātrā, cittamātrā)

これは瑜伽行派で初めて説かれたと一般に信じられていますが、すでにパーリ語の文献、すなわち Saṃyutta Nikāya (相応部經典) と Anguttara Nikāya (増支部經典) の中に、唯識に相当する思想の根源があることを私は見つけました。

大乘佛教の独創的な教義であると思われる空、阿頼耶識、唯識の根源も、実はパーリ語の原典にすでに見出されることが明らかになったと思います。パーリ語の原始經典ではそれらは種や芽の状態であって、充分にのびておりません。大乘佛教でそれらが成長して大きな樹木になったのです。それらの思想は大乘佛教で哲学的あるいは心理学

的に深められ、展開しました。その思想は、すでに原始佛教の經典の中にあるのです。その教えは本来、佛教の中にあつたものでありますから、佛陀の教えであります。龍樹の教えでもなく、無著の教えでもなく、世親の教えでもなく、それは佛陀の教えであります。龍樹、無著、世親等の諸論師がそれらを哲學的心理學的に深め、大きく展開させたのであります。

以上述べた基本的な教義がテーラワダ佛教でも大乘佛教でも共通して説かれていることが明らかになりました。それ以外のもので、兩佛教の間で相違があるとしても、それらは二次的なもので、基本的な教義ではないと思ひましたが、同じ基本的教義に基づいているテーラワダ佛教と大乘佛教とは一つの佛教であります。

ところで、テーラワダ佛教と大乘佛教との間に、いくつか異なつたところがありますが、それらは外面的な違いであります。例えば、僧の衣は各国によつて異なつております。修行方法、儀式などは確かに異なつています。しかし、それらは二次的なものであり、本當に重要なことではありません。佛像をとりあげてみると、インドの佛像はインド人に似ています。中国に來れば、それは中国の佛像になります。日本では日本の佛像、チベットではチベットの佛像、スリランカではスリランカの佛像になります。このように各国によつて佛像のかたちは異なつていますが、それは本質的には同じ佛陀の像であります。

本質的な佛教の真理はダルマ(法)と呼ばれ、外面が変わつても變ることのないものであります。それが佛教と呼ばれるものであり、外面的なものとは佛教の本質ではありません。外面的なものは服に、本質的なものは服を着る人に譬えることができます。服は人ではありません。人はそれ以外のものです。ちやうどそのように、外面的な相違は佛教にとつてそれほど重要ではありません。本質的な佛教の真理に關しては、テーラワダ佛教も大乘佛教も、何の区別もありません。ですから私は、テーラワダ佛教と大乘佛教との間に本質的に何の相違もないと思ひます。テーラワダ佛教徒も大乘佛教徒もすべて同じ佛教徒であります。テーラワダ佛教と大乘佛教とは一つの佛教であります。

本日はお招きいただきまして、ありがとうございます。故鈴木大拙先生は、かつて大谷大学の教授であられたとお聞きしております。偉大な佛教学者であられた鈴木大拙先生と御縁の深い大学でお話しする機会をいただき、たいへん嬉しく思っております。ありがとうございます。

比丘ワルポーラ・ラーフラ博士は、スリランカ出身の学僧である。博士は、スリランカでテラワードの伝統的な佛敎の学問を修し、その後スリランカ、カルカッタ、パリの諸大学で学んだ。フランスでは、ソルボンヌ大学、Collège de France で大乗佛敎の研究を行なった。

博士はその後スリランカの Vidyānāikāra 佛敎大学の教授になり、一九六七—一九六九の三ヶ年間に、Vidyodaya 大学の学長、その後 Northwestern 大学客員教授を歴任した。スリランカの佛敎教団は一九六五年に、三蔵に関する最高の権威者に与えられる Tripiṭaka-vāgīśvaraśāhārya という称号を博士に贈っている。この最高の称号を有する学僧は現在スリランカでは三人ほどしかいないことである。

博士は、The History of Buddhism in Ceylon; What The Buddha Taught; The Heritage of The Bhikkhu を著わしているが、これらの著書は数ヶ国語に翻訳され、広く読まれている。博士は、大乗佛敎の研究者でもあり、阿毘達磨集論の佛訳 (Le Compendium de la Super-doctrine, Paris, 1971) を出版し、その英訳も出版されることになっている。

ここに掲載した博士の講演は、昭和五十一年十月八日、大谷大学佛敎学会學術懇談会において行なわれたものである。本誌に掲載するに際し、学問的な注をつけていただきましたが、そのための時間もなく、残念でならない。

訳者記